

好ましい分散投資が支える米投信の拡大

世界のオープンエンドファンド（以下ファンドをFと表記）資産（ETF含む）は、2008-2017年の10年間にどの地域でも2倍以上に拡大し49.3兆ドルに達した。その中でも米投信の堅調ぶりが目立つ。2017年末のミューチュアルF資産は18.7兆ドル、ETFも3.4兆ドルと日本の家計資産を凌ぐ規模に成長しており、日米の金融力の格差が目立つ。この成長の大きな要因として、株式市場の暴落を契機として運用資産や投資手法の分散化が進み、リスクの軽減に努めてきたことが挙げられる。

まずITバブルの破裂時である。従来米国のミューチュアルFでは投資対象の多くが国内物で、アクティブ運用による投資が中心であった。たとえば株式投信・ETFは米国株で占められ、海外株は14%程度と少なかった。しかし米IT株を中心とする株価下落の打撃への反省やドル安への期待から、2004年頃から海外株への分散投資が始まり、2006年以降海外株式比率は24%-29%と倍増した。現在この辺りの水準が好ましい海外株比率と意識されているようだ。海外株投資はグローバルに投資するファンドが多く、単一国のカントリーリスクは抑えられている。

次のより大きな転換点が金融危機である。危機以降、リスク管理の観点からさまざまな投

資商品や運用手法が増加したが、大きいのがインデックスF、ETF、ハイブリッドF、オルタナティブF等への投資の広がりである。インデックスFとETF合計のシェアは金融危機前には15%だったが、資産配分を重視するフィーベースのフィナンシャルアドバイザーによる活用などが牽引し2017年には35%になった。インデックス運用はさらに、時価総額加重以外の商品に拡大している。

分散投資をめざすバランス型（ハイブリッド）Fとしては、ターゲットデートFの増加が注目される（FoFsで組成されるためICIではバランス型のカテゴリにはカウントされていない）。確定拠出年金のデフォルトFとなっていることから人気が高く資金流入が続いており、今や1.1兆ドルと日本の公募投信資産を凌ぐ規模である（ライフスタイルFも4000億ドルある）。ターゲットデートFは、資産形成期にはリスク資産に積極的に分散投資をする。そして定期的に資産の自動リバランスをするため、米国株が堅調なときに米国株を売り外国株を購入するなどの逆張り投資が目立っており、上記の分散投資の拡大に貢献している。

（参考：ICI Fact book）

<文責>

金融イノベーション研究部契約研究員

荒木 充衛

focus@nri.co.jp